

2016/01/05

フィリピン大学 交換留学報告書

国際関係学部 国際関係学科
行動コース 3年

私は、平成28年8月から12月までの約5か月間、フィリピンはマニラのフィリピン大学ディリマン校に交換留学制度を用い留学した。5か月という限られた期間の中で私が見て、聞いて、体感したことをここに共有させていただく。

フィリピンに行くのは、その時が初めて出会った。留学先にフィリピンを選んだのは、学部属することなく比較的自由に授業が選択できるフィリピン大学ならではの制度と価格だ。1度も静岡を出て暮らしたことがなかったため、大学生のうちに生活することの大変さを味わっておきたいということも理由のひとつだ。

フィリピン初心者としての私にとって、生活を始めた当初はカルチャーショックの連続で頭がくらくらした。フィリピンならではの（腐った）バナナなのかゴミなのか分からないツンとした匂いの中、たくさんの人やジープニーが行き交うにぎやかな街。信号がない代わりにゴミがあちこちに捨てられた道路を、車をかき分けながら進んでご飯を買いに行く。洗濯機がないのでランドリー屋さんをお願いするが、しょっちゅう服が無くなる。ちゃんと洗ったのか分からないスプーン、ゴキブリの住む部屋、2日に1度詰まるトイレなど、日本との違いにたびたび驚かされた。なんて日本は素晴らしいのかと思った。何度日本に帰りたと思ったか。

しかし、慣れとは恐ろしいものだ。次第にフィリピンスタイルに染まった私はいちいち日本と比べることは減ったし、違いを楽しめるようになった。フィリピン人のおおらかな国民性に救われる時もあったし、もう少し事務手続きをしっかりとってなんて思っても、フィリピンだからまあいいやで収まる。ゴキブリも紙コップとビニール袋で退治するし、簡単なトイレ詰まりなら治せる。お菓子はみんなで食べるためにと大きめのものを用意する。こうして振り返ってみると、以前と比べて遅くなったなど我ながら感心する。

フィリピンと言ったらセブ島とバナナくらいしか知らなかった私も、フィリピンのことをもっと知ることが出来た。セブ島以外にも素敵な景色をフィリピンはたくさん持っているし、バナナ以外にもおいしいフルーツやデザートがある。自分でフィリピンの良いところを探すことで、自分自身が「楽しい」「美しい」「好き」と感じるものが何かが段々見えてきて、自分の感情にも敏感になれたように思う。

もちろん、勉強も（それなりに）頑張った。私は服飾学部の東南アジア衣服歴史という授業と観光学部の観光マネジメントという授業を主に取った。自分が日本で勉強していることと少し違ったが、日本にいるときにフィリピン大学で開講されている授業を眺めていたときに、これは面白そうだと思い、服飾の授業はゼミの教授に内緒で取った。これが、私の目指す進路を変えたきっかけだった。服飾の授業では、フィリピンをはじめとする東南アジアの民族衣装や衣服の歴史を、文献を読みながら学んだ。中間試験では、古着やごみで「フィリピンらしい服」を制作しろ、というアップサイクルの課題が出た。その時私はアップサイクルの存在を初めて知った。そして、ごみをごみとして考えるのではなく資源として使用する、さらに良いものに姿を変えて再び輝く、使用する側も我慢することなく使用できるというアップサイクルの考えに魅力を感じたし、ごみがあふれているフィリピンでそれが考えられていることに感心した。中間試験は提出が遅れて落単ギリギリの成績となってしまった。ただ、私は環境にやさしい且つ消費者がその商品そのものに魅力を感じる製品を届ける仕事や、ごみのマネジメントに関する仕事に就きたいと感じるようになった。留学をきっかけに、希望する進路が変化した。これから先、こういった変化が私の中で再び現れるかは分からないが、この経験は自分の進路を考える大きなきっかけとなった。

勉強でも、それ以外でも、この留学でわたしはすこし強くなれたと思う。楽しいこと、辛いこと、悲しいこと、面白いこと、すべてひっくるめて私の留學生活であった。機会があるなら、フィリピンに惹かれるものがあるなら、ぜひフィリピンで生活してみたいかだろうか。すべらない話に出られるんじゃないかってくらい話のタネができます。